Japanese Association of Educational Psychology

Japanese Journal of Educational Psychology, 1995, 43, 354—363

現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察

岡　田　　努[1]

FRIENDSHIP, SELF-AND FRIEND-IMAGE AMONG CONTEMPORARY COLLEGE STUDENTS

Tsutomu OKADA

This study explored the characteristics of friendship among contemporary adolescents. The following items were examined in this study : self-esteem, self-consciousness, friendship, ideal-self, real-self, and friend image. Through the process of the cluster analysis, three clusters were categorized : 1) adolescents who took crowd relationship with their friends ; 2) adolescents who were worrying about hurting their friends ; and 3) adolescents who avoided a deep relationship with others. The adolescents in group one showed little insight toward themselves. The adolescents in group two showed some characteristics such as high insight, a significant positive correlation between real-and ideal-self image, already described in numerous researches on adolescents in the past. Adolescents in group three showed little association among real-self, ideal-self, and friend-image. All subjects in this study seemed to recognize each image i.e., real, ideal, and friend separately, when they described themselves and others in positive terms. In addition, the subjects selected their friend images in reference to their own self-images, when they described themselves and others in negative terms.

Key words : friendship, contemporary adolescent, ideal-self image, real-self image, friend image.

1. 現代の青年の友人関係の特徴

青年期における親密な友人関係・親友関係は，青年の自己概念に大きな影響を与えることがしばしば指摘されている（岩永, 1991 ; Blieszner, 1994 など）。Waterman (1993) は，青年期において重要な他者(significant others)が青年の人生の選択の幅を広げ，自我同一性の探求の際の積極的関与 (commitment) に，より重要な意味づけを与えることを指摘している。また松井 (1990) は安定化・社会的スキルの学習機能・モデル機能などを青年期の友人関係の機能として挙げている。しかし一方で，現代の青年の友人関係の特徴として，自分の内面を開示することを避け，互いに傷つけたり傷つくことを非常に恐れる，形だけの円滑な関係を求めるといった傾向が指摘されている（栗原, 1989 ; 千石, 1991 など)。

岡田 (1991) は，大学生において，自分自身に対する内省に乏しい青年と，友人関係の深まりを回避し友人関係を楽しく維持しようとする青年とが別の群に分類されるとしている。岡田(1993a)は大学生の自分自身への内省傾向と友人関係の特徴から，①内省に乏しく友人関係を回避する傾向の高い青年，②表面的には明るく友人関係をとりながらも他者からの評価や視線に気を遣う青年，③自己の内面に関心が高く自分の生き方などを深刻に考える，従来の青年期についての記述とほぼ合致する青年の3群を見出した。岡田 (1993b) は，大学生の友人関係から，友人関係場面で深刻さを回避し楽しさを求め，友人と一緒にいることを好む“群れ志向群”，対人関係の深まりを避け，他者からの評価を気にする“対人退却群”，心を打ち明け，1人の友人との関係を大切にする“やさしさ志向群”の3群を見出した。しかし友人関係の特徴がカテゴリカルなデータ

[1] 新潟大学 (Niigata University)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

として採取されているために詳細な検討が困難な点，数量化III類によるカテゴリ分類の際の解釈に疑問が残る点，などの問題が残された。上野・上瀬・松井・福富（1994）は心理的距離及び友人に対する同調性から，現代青年の交友関係を表面的交友，個別的交友，密着的交友，独立的交友に分類し，それぞれの特徴を検討した。その結果，同調性の高い群では他者の視線を気にする傾向が高いこと，表面的交友をとる者は公的自己意識が高く，家庭指向が強いこと，特に男子の場合，劣等感や問題行動への念慮などの葛藤を抱えていることが指摘された。以上のように，現代青年の友人関係として，表面的な親密さや楽しさを求める傾向，関係が深まることを恐れる傾向，互いが傷つくことを恐れる傾向などが共通して指摘されている。しかし，こうした現代青年の友人関係の特徴が青年自身の自己概念とどのような関連をもつかについては，これまでのところ十分な検討がなされていない。

2. 自己意識特性との関連

Feningstein, Scheier & Buss（1975）は，自分自身に注意を向けやすい性格傾向として，自己意識特性という性格傾向を述べている。これは，自分自身の内面に注意の向きやすい“私的自己意識”と，他者の目に映る自分自身に注意が向きやすい“公的自己意識”に分けられる。岡田（1993a）は，表面的に明るい友人関係をとる青年の特徴として，自己評価が高く，他者からの視線や評価に敏感な点を挙げている。すなわち，このような青年は，円滑な友人関係を維持することへの関心が高いため，友人からの評価や視線に対して敏感であり，公的自己意識が高いことが考えられる。

3. 理想自己像・現実自己像との関連

岡田（1987）は，中学生から大学生にかけて，以下のような発達的変化が見られるとしている。すなわち，中学生期において同性の親友像が理想自己像のモデルとなる過程が見られ，高校・大学生期にはこの理想自己像が現実自己像に対する比較対象として機能すること，また中学・高校生期よりも大学生期において現実自己像と理想自己像の差異と自己評価の関連が顕著に見られることなどである。しかし友人関係の深まりを回避する青年の場合，理想自己像のモデルとして同性の親友像を十分に取り入れておらず，その結果，自己を評価する際にも，現実自己像と理想自己像の間での比較過程が生じにくいことが考えられる。

一般に理想自己像（こうでありたいと思う自己像）と現実自己像の差が小さいほど個人の自己評価は高いとされている（Harter, 1983）。しかし，遠藤（1992）；Endo（1992）は“こうはなりたくないと思う自己像（負の理想自己像）”と現実自己像の差は，“こうでありたいと思う自己像（正の理想自己像）”と現実自己像の間の差よりも，自己評価との相関が高いことを見出している。この結果は次のように考えることができる。すなわち，ある属性Aについて“Aではない”という判断は，“Aである”こと以外のすべての場合について成立する。言いかえれば，否定的属性を“持たない”という自己認知（例：自分は悪い人間ではない）は，肯定的属性を“持つ”という自己認知（例：自分は良い人間である）よりも成立する可能性が大であるといえる。このことから，負の理想自己像が，自己評価のための比較対象としてより用いられやすいものと考えられる。同様に，青年の理想自己像のモデルとしての親友像を検討する場合，親友像の肯定的な属性と否定的な属性を，別個に検討する必要があると考えられる。

以上をふまえ，本研究では以下の点について検討する。先に述べたように，表面的な同調を指向する青年はそうでない青年に比べ，公的自己意識が高いだろう。また大学生期において，現実自己像と理想自己像の類似性，自己評価と現実自己像・理想自己像間の隔たりとの相関は，肯定的側面よりも否定的側面においてより顕著に見られるだろう。しかし表面的な同調を指向する青年はそうでない青年に比べ，このような現実自己像，理想自己像及び自己評価の間の関連は顕著には見られないだろう。

方　法

調査時期

第1次調査　1992年6月，第2次調査　1993年2月

新潟県内の4年制大学の教養部学生（おもに1，2年次）を対象に1次・2次調査とも同一の授業時間の一部を用いて施行した。両調査間での回答者は，生年月日・性別・兄弟数・兄弟順位の一致をもとにして照合された。有効回答数は以下の通りである。

第1次調査　男子140名，女子91名，不明2名　計233名。

第2次調査　男子128名，女子122名，不明1名　計251名。

第1次・第2次調査で照合できた者　男子93名，女子72名，計165名。

尚，第1次・第2次調査の回答者は性別・学年・生年月日・兄弟数・兄弟順位のデモグラフィック項目が一致した場合，同一回答者とみなした（尚各次調査内で全く同一の属性を持つ回答者が第1次調査で3名，第2次調査で4

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

名見られたが，これらは回答者の区別が不可能なため照合から除外された)。

尺　度

第1次調査　(a)友人関係尺度：岡田(1993b)で見出された友人関係の3特徴に関する22項目について評定尺度化したもの。(b)自己評価尺度：Rosenberg (1965) が作成し山本・松井・山成 (1982) が邦訳した自己評価尺度10項目。(c)自己意識尺度：菅原 (1984) の邦訳した自己意識尺度21項目。いずれも0（全くあてはまらない）から5（非常にあてはまる）の6件法である。

第2次調査　self differential 尺度形容詞対中学生用（長島・藤原・原野・斉藤・堀, 1967）より，岡田 (1987) における因子分析結果をもとに，各因子(向性, 誠実性, 強靭性）から以下の基準で形容詞対を選択した。すなわち，因子負荷量が.5以上，複数の因子に高い負荷量を持たない，項目間で意味の重複しない，“不..”“..ない”といった否定表現を用いた項目を除外する，などである。以上によって11の形容詞対が選択された (TABLE 1)。さらに自他認知の肯定的側面と否定的側面を別個に調査するため，形容詞対を肯定的意味内容の項目（以下肯定項目と記す)・否定的意味内容の項目（以下否定項目と記す）それぞれ別個に呈示する単極尺度に改めた上で，理想自己像(なりたいと思う自分)，負の理想自己像（なりたくないと思う自分)，現実自己像（現在の自分)，同性の親友像(以下親友像と記述)について評定させた。尚，理想自己像は肯定項目のみ，負の理想自己は否定項目のみからなり，他は肯定・否定両項目からなっている。

評定はすべて4件法で，それぞれ以下の段階によって評定された。すなわち理想自己像では“とてもなりたい，なりたい，ややなりたい，‘なりたい’とは思わない”，負の理想自己像では“絶対なりたくない，なりたくない，ややなりたくない，‘なりたくない’とは思わない”，現実自己像及び親友像では“非常にあてはまる，ややあてはまる，あまりあてはまらない，全くあてはまらない”の各段階である。

TABLE 1　自他認知項目として用いた形容詞

	肯定項目	否定項目
I向性	陽気な	陰気な
	明るい	暗い
	楽しい	さびしい
	おもしろい	つまらない
	おしゃべりな	無口な
II誠実性	きちんとした	だらしない
	ていねいな	乱暴な
	清潔な	不潔な
	素直な	意地っぱりな
	静かな	うるさい
III強靭性	強い	弱い

註：因子名は岡田(1987)によるもの

結　果

1. 友人関係尺度の因子分析

第1次調査の有効回答者全員 (n=233) を元に，友人関係項目について主因子法による因子分析を行い3因子を得た。Varimax 回転後因子負荷量の高い項目を解釈した結果，第I因子(6項目)は“相手の考えていることに気をつかう・互いに傷つけないよう気をつかう”など友人に気を遣いながら関わる項目から成り「気遣い」因子と命名した。第II因子(6項目)は“お互いのプライバシーには入らない・お互いの領分にふみこまない”など深い関わりを避けて互いの領域を侵さないといった内容の項目から成り「ふれあい回避」因子と命名した。第III因子(5項目)は“ウケるようなことをよくする・みんなで一緒にいることが多い”など集団で表面的な面白さを指向する関わり方を示す項目から成り「群れ」因子と命名した (TABLE 2)。

2. 自他認知項目の因子分析

第2次調査の有効全回答者251名を基に肯定項目・否定項目別個に主因子法による因子分析を行った。因子分析に当たっては現実自己像・理想自己像・親友像をそれぞれ1ケースとみなし，165×3＝495ケースとして分析した。その結果，肯定項目・否定項目それぞれで2因子ずつが抽出された。Varimax 回転の後，肯定項目については，第I因子は“きちんとした・ていねいな・清潔な”など，静的な性格特性を表現する項目から成り，「静的」因子と命名された。第II因子は“陽気な・明るい・おもしろい”など活動的な性格特性を表わす項目から成り「動的」因子と命名された。否定項目についても同様に第I因子は“うるさい・だらしない・乱暴な”などの項目から成り「動的」因子と命名され，第II因子は“暗い・陰気な・無口な”などの項目から成り「静的」因子と命名された (TABLE 3)。

3. 群の抽出

2次にわたる調査で照合された回答者165名について，友人関係尺度各因子の合成得点を変量としたウオード法によるクラスタ分析を行い回答者を分類したところ，クラスタ内平方和増分0.16を基準として3クラスタが得られた (FIGURE 1)。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2 友人関係尺度の因子分析（Varimax 回転後）

番号	項目	I 気遣い	II ふれあい回避	III 群れ	共通性
17.	相手の考えていることに気をつかう	.694	.204	-.004	.524
16.	互いに傷つけないよう気をつかう	.663	.274	-.048	.517
19.	自分を犠牲にしても相手につくす	.640	-.166	-.022	.438
18.	お互いの約束は決してやぶらない	.521	.237	-.005	.328
15.	友達グループのメンバーからどう見られているか気になる	.498	-.183	.032	.282
21.	友達グループのためにならないことは決してしない	.491	.069	-.033	.247
10.	お互いのプライバシーには入らない	.172	.763	-.065	.617
4.	お互いの領分にふみこまない	.138	.751	-.092	.592
12.	相手に甘えすぎない	.215	.518	.017	.315
7.	相手の言うことに口をはさまない	.204	.435	-.092	.238
a)20.	真剣な議論をすることがある	.218	-.405	-.047	.214
a)6.	心を打ち明ける	.223	-.493	.010	.293
9.	冗談を言って相手を笑わせる	-.007	-.083	.856	.739
5.	ウケるようなことをよくする	-.087	-.063	.803	.657
14.	みんなで一緒にいることが多い	.003	-.248	.582	.400
11.	楽しい雰囲気になるよう気をつかう	.251	.093	.522	.344
2.	一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	-.281	.118	.484	.327
	平方和	2.475	2.345	2.251	

註：a）反転項目

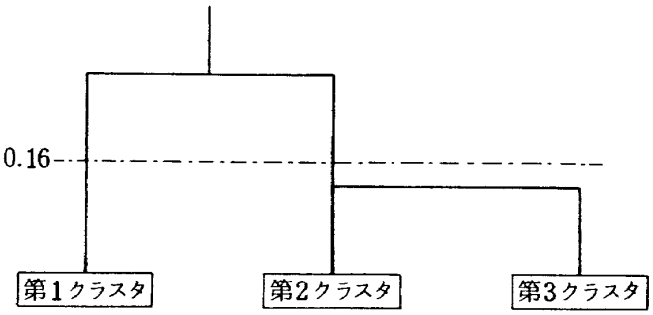

FIGURE 1 友人関係尺度による調査対象者のクラスタ分析のデンドログラム

各因子の合成得点ごとの標準得点を求め，因子間での標準得点の平均値の差を一元配置分散分析によってクラスタごとに比較した。その結果 TABLE 4 にあるように，第1クラスタでは F＝64.53（P<.01）で有意な差が見られ，多重比較(NewmanKauls の SNK 法)の結果「群れ」因子の標準得点が他に比べ高かった。第2クラスタでは F＝24.41（P<.01）となり，同様に多重比較の結果，得点の小さい側から順に「ふれあい回避」「群れ」「気遣い」の順で各因子での標準得点間に有意差が見られた。第3クラスタでは F＝30.39（P<.01）で，得点の小さい側から「群れ」「気遣い」「ふれあい回避」の順で各因子間で有意な差が見られた。このことから第1クラスタは群れ的友人関係をとるクラスタと考えられ，「群れ関係群」と命名された。同じく第2クラスタは「気遣い関係群」，第3クラスタは「関係回避群」と命名された。

TABLE 3 自他認知項目の因子分析（Varimax 回転後）

肯定項目 番号	項目	I 静的	II 動的	共通性
6	きちんとした	.795	.037	.633
7	ていねいな	.745	-.049	.557
8	清潔な	.720	.231	.572
9	素直な	.706	.091	.507
11	強い	.593	.253	.415
1	陽気な	.212	.833	.738
2	明るい	.318	.820	.773
4	おもしろい	.307	.766	.679
3	楽しい	.444	.725	.722
5	おしゃべりな	-.275	.594	.429
a)10	静かな	.317	-.445	.299
	平方和	3.167	3.158	

否定項目 番号	項目	I 動的	II 静的	共通性
10	うるさい	.825	-.141	.701
6	だらしない	.737	.313	.641
7	乱暴な	.701	.148	.513
9	意地っぱりな	.647	.218	.466
8	不潔な	.628	.450	.596
11	弱い	.551	.482	.536
2	暗い	.316	.842	.809
1	陰気な	.272	.806	.723
5	無口な	-.224	.756	.621
4	つまらない	.461	.627	.606
3	さびしい	.513	.582	.601
	平方和	3.529	3.283	

註：a）反転項目

4. 群間での各変数の比較

各尺度得点について，群間での平均値の差を一元配置分散分析によって比較した。TABLE 5 にあるように，自己評価尺度得点（F＝.51）および自己意識尺度の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 4 標準得点化された友人関係尺度得点のクラスタごとでの平均値

クラスタ/因子	気遣い	回避	群れ	F	多重比較
第1クラスタ	-.96	-.73	.87	64.53**	気遣い，回避<群れ
第2クラスタ	.32	-.85	-.25	24.41**	回避<群れ<気遣い
第3クラスタ	.20	.70	-.20	30.19**	群れ<気遣い<回避

註：*p<.05, **p<.01

公的自己意識下位尺度得点（F＝1.29）については，有意な差は見られなかった。自己意識尺度の私的自己意識下位尺度得点ではF＝5.16（P<.01）となり，多重比較の結果，群れ関係群が他の群よりも低い得点であった。自他認知項目については，肯定項目・否定項目とも現実自己像のみに群間での有意差が見られた。肯定項目では静的因子でF＝6.13（P<.01），動的因子でF＝13.56（P<.01）となり多重比較の結果，静的因子では群れ関係群が気遣い関係・関係回避群よりも低く，動的因子では群れ関係群が他の2群よりも高かった。否定項目においては動的因子でF＝6.32（P<.01）静的因子でF＝4.62（P<.05）となり，多重比較の結果，動的因子では群れ関係群が他の群よりも高く，静的因子では群れ関係群が他の群よりも低かった。

各群ごとで，現実自己像・理想自己像・親友像間の平均値の比較を一元配置分散分析によって行った（TABLE 5）。多重比較の結果，肯定・静的因子では，現実自己像，親友像，理想自己像の順で肯定的になった。肯定・動的因子では，気遣い関係群においては，理想自己像・親友像が現実自己像よりも肯定的であり，関係回避群では親友像が最も肯定的であり，次いで理想自己像，現実自己像の順で平均値が小さかった。否定・動的因子では，各群とも現実自己像が最も否定的であり，次いで親友像，理想自己像の順で平均値が小さかった。否定・静的因子では各群とも現実自己像が他に比べ否定的であった。

5. 自他認知間の相関

理想自己像，現実自己像，親友像間での群ごとの相関関係を求めた（TABLE 6）。ここに見られるように，群れ関係群では肯定・動的及び否定・静的因子において，現実自己像と親友像の間に.4以上の比較的高い相関関係が見られた。気遣い関係群では否定項目において現実自己像と理想自己像間，否定・静的因子での現実自己像と親友像間に.38～.52の比較的高い相関が見られた。関係回避群では三者間で大きな相関関係は見られなかった。

TABLE 5 各変数の平均値（上段）と標準偏差（下段）

クラスタ	人数	自己評価	公的自己意識	私的自己意識
全体	165	26.74	33.47	29.53
		4.72	5.23	4.88
群れ関係	33	27.24	32.30	27.42
		4.74	5.01	5.17
気遣い関係	44	27.05	34.23	30.93
		5.14	5.15	4.91
関係回避	88	26.40	33.53	29.63
		4.53	5.33	4.52
F（クラスタ間）多重比較		.51	1.29	5.16** 群<気,回

	肯定—静的				肯定—動的			
クラスタ	理想自己像	現実自己像	親友像	F値（上段）多重比較（下段）	理想自己像	現実自己像	親友像	F値（上段）多重比較（下段）
全体	16.15	12.53	13.79		17.70	16.07	18.88	
	2.86	2.08	2.11		3.12	3.36	3.18	
群れ関係	15.79	11.46	13.61	F=17.83**	18.06	18.58	19.46	F=2.12ns
	3.84	2.31	1.85	R<Fr<I	3.83	3.04	3.25	
気遣い関係	16.55	12.98	14.11	F=29.22**	17.79	15.70	18.75	F=13.31**
	2.71	1.77	2.23	R<Fr<I	2.89	3.31	3.50	R<I, Fr
関係回避	16.09	12.72	13.69	F=64.33**	17.53	15.31	18.73	F=33.03**
	2.51	2.02	2.14	R<Fr<I	2.95	3.06	2.99	R<I<Fr
F	0.70	6.13**	0.74		0.36	13.56**	0.68	
多重比較		群<気,回				回,気<群		

	否定—動的				否定—静的			
クラスタ	理想自己像	現実自己像	親友像	F値（上段）多重比較（下段）	理想自己像	現実自己像	親友像	F値（上段）多重比較（下段）
全体	10.20	13.73	11.81		8.58	10.96	8.18	
	3.91	2.87	2.77		3.72	2.93	2.28	
群れ関係	10.21	15.27	11.85	F=24.35**	7.94	9.61	7.64	F=5.02**
	3.66	3.10	2.78	I<Fr<R	3.67	3.43	2.36	Fr,I<R
気遣い関係	9.30	13.41	11.75	F=29.48**	8.21	11.34	8.32	F=33.43**
	2.83	2.86	3.01	I<Fr<R	2.64	2.82	2.28	I, Fr<R
関係回避	10.65	13.32	11.82	F=16.61**	9.00	11.28	8.32	F=23.55**
	4.39	2.62	2.68	I<Fr<R	4.17	2.66	2.25	Fr,I<R
F	1.77	6.32**	0.01		1.28	4.62*	1.18	
多重比較		回,気<群				群<回,気		

註：*p<.05, **p<.01

R：現実自己像 I：理想自己像 Fr：親友像 群：群れ関係群，気：気遣い関係群，回：関係回避群

上段：平均値 下段：標準偏差

また自他認知項目による理想自己像，現実自己像，親友像それぞれの間の距離をDスコア（$D=\Sigma\sqrt{d^2}$）によって求め，自己評価得点との間のピアソンの積率相関係数を群ごとに求めた（TABLE 7）。群れ関係群では，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 6 理想自己像・現実自己像・親友像間の相関
(ピアソンの積率相関)

因子	肯定・静的		肯定・動的		否定・動的		否定・静的	
	理想自己像	現実自己像	理想自己像	現実自己像	理想自己像	現実自己像	理想自己像	現実自己像
[群れ関係群]								
現実自己像	-.19		.27		.23		.25	
親友像	.21	-.14	.32	.43*	.01	.13	.23	.42*
[気遣い関係群]								
現実自己像	.19		.29		.52**		.38*	
親友像	.03	-.17	.35*	.27	.10	.12	.32*	.45**
[関係回避群]								
現実自己像	.16		-.08		.16		.08	
親友像	.11	.27	.22*	.18	.13	.22*	.08	.15

註：無相関検定 *p<.05, **p<.01

自己評価得点との間で，肯定・動的因子及び否定・静的因子において，現実自己像－親友像のDスコアとの間で-.49～-.54と比較的高い負の相関が見られた（自己評価得点 対 肯定・動的で r=-.54, 自己評価得点 対 否定・静的で r=-.49)。気遣い関係群及び関係回避群では，自己評価得点とDスコアの間に大きな相関は見られなかった。

TABLE 7 自己評価と理想自己像・現実自己像・親友像間のDスコアの相関(ピアソンの積率相関)

クラスタ	肯定—静的			肯定—動的		
	現実-理想	理想-親友	現実-親友	現実-理想	理想-親友	現実-親友
1 群れ関係	-.05	-.09	-.21	-.19	-.20	-.54
2 気遣い関係	-.26	-.16	-.35	-.20	-.13	-.15
3 関係回避	-.12	-.01	-.16	-.23	.12	-.25
クラスタ	否定—動的			否定—静的		
	現実-理想	理想-親友	現実-親友	現実-理想	理想-親友	現実-親友
1 群れ関係	-.38	-.15	-.37	-.28	-.26	-.49
2 気遣い関係	-.12	.03	-.36	-.13	-.15	-.18
3 関係回避	-.07	-.06	-.11	-.30	.06	-.33

註：Dスコアは本来正規分布が仮定されないため，正規分布を前提とする無相関検定は行っていない

6. 自他認知項目の構造

自他認知項目での自己像・親友像間の関連を検討するために，柴山(1994)を参考に個人差多次元尺度法による分析を行った。肯定項目，否定項目別個に，11項目×3対象＝33項目間の相関行列を求め，これを $\sigma=\sqrt{1-r^2}$ によって非類似性の行列に変換し入力データとした。各群共通の空間に項目を布置したものをFIGURE 2, 3に示す。肯定項目では，FIGURE 2より，理想自己像，現実自己像，親友像がそれぞれ別個のまとまりをもって布置され，第I軸が自己対非自己，第II軸が想像対現実を分ける軸であると考えられた。否定項目では，理想自己像が第III象限付近に独立し，現実自己像・友人像の動的因子項目が第II象限，同じく静的な項目が第I・IV象限の境界付近にまとまっていた。

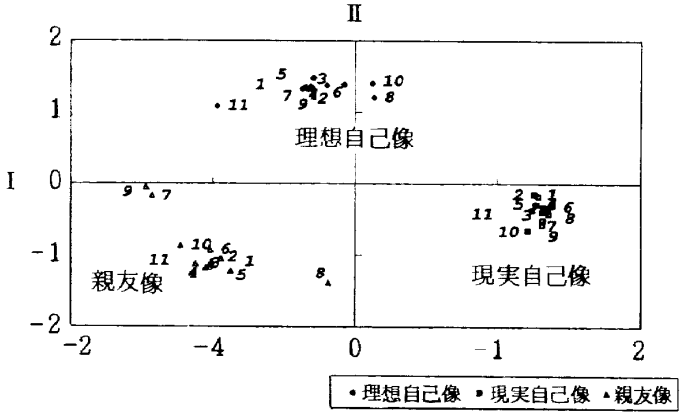

FIGURE 2 肯定項目における現実・理想自己像・親友像の布置 (斜体字は各項目の番号)

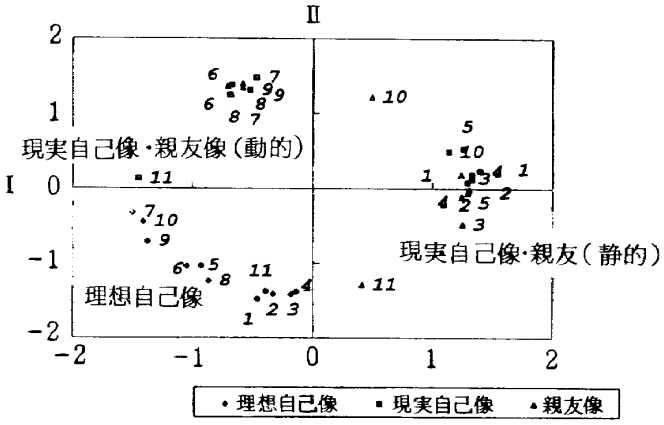

FIGURE 3 否定項目における現実・理想自己像・親友像の布置 (斜体字は各項目の番号)

クラスタごとの重みづけ係数のプロットをFIGURE 4, 5に示す。肯定，否定項目ともに関係回避群が第I軸(自己－非自己)にやや重きをおいた自他認知であることが見出された。

考　　察

各群の特徴

1. 群れ関係群

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

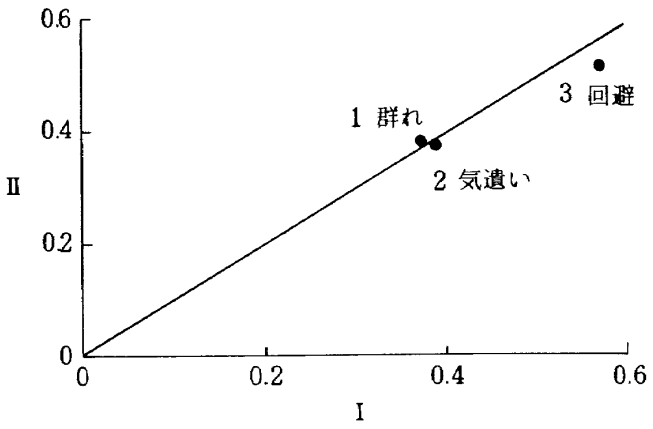

FIGURE 4 肯定項目における重み係数のプロット

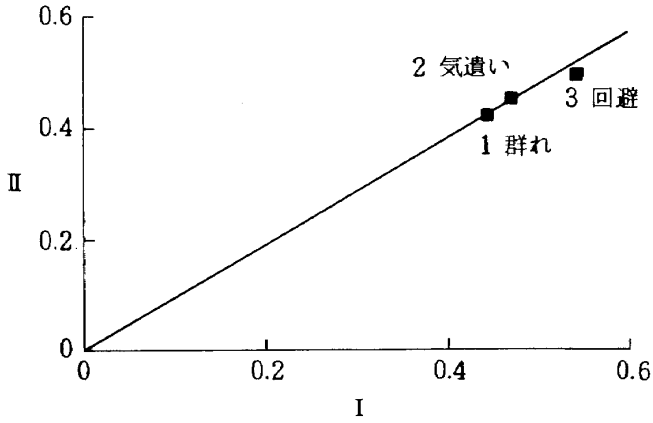

FIGURE 5 否定項目における重み係数のプロット

当初の仮説とは異なり，本群では私的自己意識得点が他の群より低かった。西平（1988）は現代の青年の特徴として，自分自身の内面に対する関心の低さを指摘しているが，本群はこうした特徴に符合する面をもつものと考えられる。しかし岡田（1991）では，友人関係で表面的楽しさを重視する，“躁的防衛の高い群”は公的・私的自己意識得点は共に高かった。これは岡田（1991）における“躁的防衛”項目が，“友達からどう思われるか気になる”“友達を傷つけないように注意を払っている”など，本研究における「気遣い」因子と内容的に重複する項目が含まれており，本研究における「群れ関係群」と「気遣い関係群」が混在した群であるためと考えられる。公的自己意識については当初考えられていたものとは異なり，群間での有意な差はみられなかった。上野他（1994）では表面的友人関係をとる“表面群”において公的自己意識が高いとされていたが，この“表面群”の分類基準のうち“心理的距離”の項目内容は本研究での「ふれあい回避」因子と共通したものが多い。すなわち，上野他での“表面群”は，表面的には集団に同調しながらも，相手との心情的関係を回避するといった，いわば集団に対して受動的に同調している青年と考えられる。一方本研究での群れ関係群は，むしろ自発的に群れ行動を指向する群と考えられ，仲間集団メンバーからの評価懸念が小さく，自己意識得点が低くなったものと考えられる。また調査対象について，高校生（上野他 1994）と大学生（本研究）での発達的な相違も考慮されなければならないだろう。

自他認知項目での現実自己像から，群れ関係群の青年は，自分自身を静的ではなく動的であると認知していることが見出された。すなわち，本群の青年は，肯定面否定面ともに活動的な自己像をもつと言える。本群においては自己評価と現実自己像－理想自己像間の差との間に高い負の相関は見られず，むしろ現実自己像－親友像間の差との間に高い負の相関が見られ，岡田（1987）とは異なる結果となった。このことから，本群においては，自己を評価する際の基準として，現実自己像－親友像の差が用いられていることが示唆される。また現実自己像と親友像の間の相関も肯定動的・否定静的において高く，さらに現実自己像よりも，親友像の方がより肯定的な得点であった。このことからも，現実の自己像を認知する際に，親友像が枠組みとして用いられていることが示唆される。群れ関係群では，私的自己意識の低さにも見られるように内省傾向が乏しく，現実自己像と理想自己像の比較のような内省を必要とする過程よりも，外的に実在する親友との比較によって自己評価がなされるものと考えられる。また同調的に友人と関わる指向性を持つ本群は，友人から受け入れられたいという要求が強いために，現実自己像－友人像間の比較過程が現実自己像－理想自己像間での比較よりも大きなものとなったとも考えられる。

2. 気遣い関係群

気遣い関係群は，私的自己意識が高く，現実自己像で静的因子得点が高く，動的因子得点が低かった。自己の内面に関心が向き，活動性が低下する点において，青年期の特徴として記述されてきた特徴と合致する群といえる。また否定項目において，現実自己像と理想自己像の間に高い相関が見られ，理想自己像と現実自己像が共通の次元で評定されているものと考えられる。これは大学生期において現実自己像と理想自己像の相関が高くなるという岡田（1987）での知見と合致する。またこうした傾向は，否定的な属性において，より顕

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

著に見られることが確認された。このことから本群は，従来の青年期の友人関係と自己概念の関係に関する記述に近いメカニズムを有する群であることが示唆される。岡田（1993a, 1993b）においても，従来の青年に関する記述と共通した特徴をもつ青年が一定の割合で見られてきたが，本研究でもこれを追認する結果となった。しかし，こうした青年においても，互いに傷つけ合わないよう気を遣うといった自己防衛的な友人関係がとられていることが見出された。

3．関係回避群

本群においても私的自己意識が高く，現実自己像は静的因子得点が高く，動的因子得点が低かった。しかし本群では自己像・親友像・他の尺度とも高い相関が見られなかった。また多次元尺度法による結果からは，自己と自己以外との区別が他の群よりも明確になされているものと考えられる。このことから本群においては，自己像と非自己（親友）像が別個の次元で認知されていることが示唆される。

以上のように現代の青年の友人関係の特質として，表面的な楽しさを求める傾向，傷つくことを恐れる傾向，深い関わりを回避する傾向が別個に見出された。

Erikson（1959 小此木訳, 1973）は，自我同一性が十分形成されていない青年は，対人関係が深まることに対して，同一性の喪失をひきおこしそうな対人的融合への恐れをいだき，関わりあうことに気を遣ったり，形式的対人関係にとどめようとする傾向を指摘している。またErikson は，青年期(stage V)における重要な対人関係の範囲として“仲間集団”を挙げており，“友情”が重要となるのは成人期初期(stage VI)であるとしている。すなわち，青年期後期においては，特定の個人との親密な関わりよりも，仲間集団への同一化と役割実験を通した自我同一性の形成が重視されている。このように考えた場合，本研究で見出された群れ関係や関わりの回避といった友人関係の特徴は，現代の青年に特異的な現象というよりも，青年期後期において従来からみられる発達過程上の特徴と考えることもできる。この点については，青年の自我同一性の状態など，他の変数との関連を含め今後の検討課題として残される。

自己像・親友像の関連について

肯定的項目については，理想自己像・現実自己像・親友像はそれぞれ分化した形でとらえられ，自己と親友がそれぞれ異なる枠組みで認知されていることが見出された。Tech(1983)は，青年期初期の友人関係は互いの類似性に基づいた関係が中心であるが，これが青年期後期から成人期以降にかけて，相手の個別性を認めた関係へと変化することを述べている。また下斗米（1990）は友人関係において接近・親密感が増大するにつれ，役割行動が明確化し，相手に対する類似性認知だけでなく，役割行動期待の基礎としての異質性認知が見られるようになると指摘している。本研究の結果から，こうした傾向が肯定的な属性においてより顕著に見られることが明らかとなった。しかし本研究は，回答者自身には直接的に自他の類似性が認知しえない，自他認知間の相関関係から得られた結果であり，回答者自身に自他の類似性の度合いを直接に尋ねた下斗米の研究の結果を直接あてはめるには慎重を期する必要がある[2]。

多次元尺度法の結果からは否定的項目においては動的，静的それぞれの側面において，現実自己像と親友像が類似したものとして認知されていた。しかし各像間の平均値の比較（TABLE 5）から，各群ともに親友像よりも現実自己像の方が否定的であり，回答者個々人のレベルでは親友像と現実自己像の間の類似性よりも差異が認知されているものと考えられる。よって好意的他者について自己との類似した性格を持っていると認知する“想定類似性（遠藤, 1993）”が機能しているとは考えにくい。また，親友像と現実自己像の間で，相関関係がありながら差異が見られるということは，個々の回答者の認知としては差異（非類似性）が認知されながらも，その差異の幅は回答者間でほぼ一定である（相関関係がある），すなわち親友像と現実自己像が，調査対象者によって比較可能な共通の次元として参照されていることが示唆される[2]。

親友像と現実自己像のこのような関連は，肯定的属性よりも否定的属性において，顕著に見出された。しかし当初考えられていたものとは異なり，理想自己像と現実自己像での類似性は否定的項目では見られなかった。これは否定的項目における負の理想自己像が，“自分がなりたくないと思う姿”という現実性の乏しい像であるため，現実に存在する親友像に比べ，現実自己像に対する評定の枠組みとして機能しにくかったも

[2] 自他認知の類似性に関しては以下のように異なった指標が考えられる。すなわち
(a)自己像と他者像の間の相関によって示されるもの。相関関係は回答者間での類似性であるため，回答者自身には，この類似性は認知されていない。
(b)自己像と他者像の差の大小によって示されるもの。(a)とは異なり回答者自身が自己像と他者像の差として類似・非類似を認知することができる。
(c)“どの程度似ていますか”“似ている所はどこですか”のように，直接自他の類似度・類似点について尋ねるもの。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

のと考えられる。

遠藤(1993)は理想自己像が好意的他者への評定の枠組みとして機能することを指摘しているが，本研究での結果とは異なっている。これは，遠藤の研究では親友像と理想自己像の関連が強い中学生期という年代(岡田, 1987)を対象としたものであり，大学生を対象とした本研究とは発達的な相違が見られるものと考えられる。

今後の課題として，否定的なモデル(なりたくない側面を持つ他者)が負の理想自己像形成において発達的な役割を果たすとすれば，非好意的他者の否定的属性に対する認知を検討する必要があると考えられる。また個々の青年の内面のありようをとらえるには質問紙法には限界がある。自己概念の形成に直接関与すると考えられる青年自身の生活体験やそれに付随する感情などを，実証性を損なわずにとらえていく方法の開発が，今後の課題として残される。

要　約

現代の青年に特有と考えられる友人関係のとり方と，現実自己像，理想自己像，親友像及び自己意識特性，自己評価の関連を検討するため，大学生に対する質問紙調査を行った。友人関係に関する尺度得点を元にクラスタ分析を行ったところ「群れ関係群」「気遣い関係群」「関係回避群」の3つの群が得られた。

群れ関係群の青年は私的自己意識得点が低く，自分自身を動的と認知しており，また親友像を基準とした現実自己像把握をしていた。気遣い関係群の青年は，内省が高く，現実自己像と理想自己像の相関が高いなど従来の青年期の特徴として記述されてきた特徴が見られた。関係回避群の青年は，自己像と親友像の関わりが希薄で，自己と非自己を明確に区別する傾向が強かった。また自己像・親友像の特徴として，肯定的項目においては，理想自己像・現実自己像・親友像がそれぞれ別個の枠組みで認知され，一方否定的項目では現実自己像と親友像の間で類似性が見られた。

引用文献

Blieszner, R. 1994 Close relationships over time. In L. Ann. Whber, & J. H. Harvey (Eds). *Perspectives on close relationship*. Massachusetts : Allyn and Bacon. Pp.1—17.

遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, **63**, 214—217.

Endo, Y. 1992 Self esteem and negative ideal selves in adults. *Japanese Psychological Research*, **34**, 39—43.

遠藤由美 1993 自他認知における理想自己の効果 心理学研究, **64**, 271—278.

Feningstein, A., Scheier, M. F., & Buss. A. H. 1975 Public and private self-consciousness : assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522—527.

Harter, S. 1983 Developmental perspectives on the self-system. In P.H.Mussen (Ed.) *Handbook of child psychology* Ⅳ (4th edition) Pp. 275—385.

岩永 誠 1991 友人・異性との関係（今泉信人・南博文編“人生周期の中の青年心理学” 京都：北大路書房 Pp.140—152.）

栗原 彬 1989 やさしさの存在証明：制度と若者のインターフェイス 東京：新曜社

松井 豊 1990 友人関係の機能“青年期における友人関係”（斉藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283—296.）

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)：Self-Differential 作成の試み 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59—67.

西平直喜 1988 青年心理研究の当面する課題（西平直喜・久世敏雄(編) 青年心理学ハンドブック 東京：福村出版 Pp.3—42.）

千石 保 1991 “まじめ”の崩壊：平成日本の若者たち 東京：サイマル出版会

岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116—121.

岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, **1**, 11—18.

岡田 努 1993a 現代の大学生における“内省および友人関係のあり方”と“対人恐怖的心性”との関係 発達心理学研究, **4**, 162—170.

岡田 努 1993b 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43—55.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton : Princeton University Press.

柴山 直 1994 多次元尺度法の基礎概念と適用例 Niigata educational psychologist, **11**, 5—12.

下斗米淳 1990 対人関係の親密化に伴う自己開示と

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報, **37**, 269—287.

菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 作成の試み 心理学研究, **55**, 184—188.

Tesch, S.A. 1983 Review of friendship development across the life-span. *Human Development*, **6**, 266—276.

上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21—28.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64—68.

Waterman, A. S. 1993 Developmental perspectives on identity formation : from adolescence to adulthood. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matterson, S. L. Archer, & J.L. Orlofsky, (Eds.) *Ego identity : a handbook for psychosocial research.* New York : Springer-Verlag. Pp. 42—68.

謝 辞

本研究の遂行にあたり統計処理に関してご教示いただいた新潟大学 柴山直助教授に感謝致します。

(1995.4.7 受稿, 8.11 受理)

資料

【自己評価尺度】

自分に自信がある
少なくとも人並みには価値のある人間である
いろいろな良い素質をもっている
敗北者だと思うことがよくある
物事を人並みにはうまくやれる
自分には自慢できるところがあまりない
自分に対して肯定的である
だいたいにおいて自分に満足している
自分が全くだめな人間だと思うことがよくある
何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う

【自己意識尺度】

[公的自己意識]

自分が他人にどう思われているのか気になる
世間体など気にならない
人に会う時，どんなふうにふるまえば良いのか気になる
自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる
人に見られていると，ついかっこうをつけてしまう
自分の容姿を気にするほうだ
自分についてのうわさに関心がある
人前で何かする時，自分のしぐさや姿が気になる
他人からの評価を考えながら行動する
初対面の人に，自分の印象を悪くしないように気づかう
人の目に映る自分の姿に心を配る

[私的自己意識]

自分がどんな人間なのか自覚しようとしている
その時々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい
自分自身の内面のことには，あまり関心がない
自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する
ふと一歩離れた所から自分をながめてみることがある
自分を反省してみることが多い
他人を見るように自分をながめてみることがある
しばしば，自分の心を理解しようとする
つねに，自分自身を見つめる目を忘れないようにしている
気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ

NII-Electronic Library Service